



平成 29 年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本銃剣道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝大多喜町立大多喜中学校（千葉県）〕は、12 月 8～10 日の 3 日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターで研究者 9 名が集まり実施された。前年度に続き、大多喜町立大多喜中学校生徒（男子 22 名・女子 1 名）の協力を得て、同校剣道場を借用し、国内唯一の銃剣道授業実践校である平塚市立土沢中学校（神奈川県）の保健体育科教諭が、翌月に迫った授業実施に向け、最終確認を含めた模擬授業が展開された。

■初日（12 月 8 日）

開講式では、鈴木 健 全日本銃剣道連盟副会長兼専務理事が主催者挨拶に立ち、「本事業は平成 22 年度から実施し、今年度で 8 年目を迎える。今年 5 月には、研究者の協力により、これまで積み上げて来た指導法の集大成ともいえる指導書が日本武道協議会から刊行された。さらに次期学習指導要領に銃剣道が明記されることとなり、これを契機に銃剣道が学校授業として 1 校でも多く採用されることを期待する。しかし、同時に課題も見えてきた。それは、銃剣道に対するイメージを変えること、指導者の育成、安全指導の徹底等を克服していかななくてはならない。今後はこのような課題を克服し、安全で楽し

く、充実した授業が展開できるよう、研究者には引き続き協力をいただきたい」と述べた。

続いて、三藤芳生^{みふじよしお}日本武道館常任理事・事務局長が挨拶を行った。「先月、スポーツ庁から塩川達夫^{しほがわたつひろ}大学校体育室長を招き、基調講演をいただき、全国から過去最多となる 93 名の参加者を得て、全国銃剣道指導者研修会を開催したということは大きな意味がある。次期学習指導要領では、銃剣道が明記されるということで、いよいよ本格的な必修化の取り組みが始まる。今回は、土沢中から新たにもう一人の保健体育科教諭を迎え実施する。銃剣道授業を継続実施するため、本研究事業を活用していただきたい。指導書・DVD も刊行し、これから可能性が広がると考える。日本武道館としても銃剣道のすばらしさを中学生に伝えられるように、全面的に協力していきたい」

開講式終了後は、武道編 DVD を視聴し、早速、模擬授業の展開について話し合いと実技における指導のポイントの確認が行われた。今回の目的は、土沢中学校での銃剣道授業の継続実施のため、現在、指導に当たっている清水陽介研究者の他に、今年度より 1 年生の授業を担当する野上政彦研究者を招き、来年 1 月に迫った授業実施に向けた準備をすることにある。リハーサル形式による昨年までの授業内容を振り返り、1 日目を終了した。

■2 日目（12 月 9 日）

2 日目は、大多喜町立大多喜中学校剣道場に場所を移し、前日確認した 5 時間想定 of 模擬授業を行った。午前は、1 年生の授業を想定し、導入部分から 3 時間目までを、T1 野上研究者と T2 田村聖一研究者がそれぞれ担当した。礼法（立礼・座礼）の確認、木銃の部位・持ち方・扱い方、木銃を持った状態での立礼・座礼を説明した。引き続き、基本動作となる足さばき、構え、直れを一斉指導で行い、基本技「直突」の指導に入った。田村研究者から外部指導者目線で「木銃の操作は右手が重要。突いた時に右手を自分の左胸まで移動させ、剣先の高さは突き終わるまで変えず、突き終わった時の木銃は床と平行になる」と具体的な手の動かし方、木銃の軌道について、生徒が動作をイメージしやすい表現で解説した。その後は、新聞紙突きやボール突きでの的当てゲームを行った。生徒たちは和やかな雰囲気の中で、授業に取り組んだ。

午後は、T1、T2 をそれぞれ清水研究者、宮内佑輔研究者が担当し、2 年生の模擬授業を行った。形の 5 本目（右の打払い突き）、6 本目（左の打払い突き）を中心に行い、お互いの間合いや呼吸を合わせるため、午前中とは違い、緊張感のある授業が展開された。清水研究者から「技術習得の際、自分が視覚優先か聴覚優先か、どちらで覚えるタイプかが分かると、短時間で飛躍的に技術が上達する場合がある。お手本を見て覚えるか、木銃の当たる音で覚えるか、意識して取り組んでください」とワンポイント解説があった。

模擬授業終了後は研修センターへ戻り、検討協議が行われた。T1 を担当した 2 人が次のように模擬授業を振り返った。

●野上政彦研究者

生徒が木銃を跨ぐ場面があったので、もう少し木銃の取り扱いについて説明する時間が必要だと思った。基本動作や動作の意味など T2 を担当してもらった田村先生に助けてもらう部分が多かった。自分自身が銃剣道未経験なので、基本的なところから勉強し直して、知識をつけ、しっかりと準備し、来年 1 月からの授業に臨みたいと思う。



●清水陽介研究者

午後から形の 5 本目、6 本目を中心に指導した。生徒同士の相対の動きが増えるので、安全管理という面では緊張感を持ち、授業に取り組ませるように意識した。内容を詰め込み過ぎたため、時間に追われ、払い方のポイントなど細かい所まで解説できなかった。来月から実施する授業では、今回の模擬研究授業の反省を活かし、授業で取り扱う内容について取捨選択した上で、充実した授業が展開できるよう、準備していきたい。

◇アンケート結果（まとめ）

終了後に行った中学生へのアンケート調査では、「的当てゲームが楽しかった」、「初めは不安だったけど、やってみると楽しい」との意見が多く、短時間の授業で銃剣道の楽しさに触れるという部分で、一定の成果が得られたと言える。

■3 日目（12 月 10 日）

最終日は、全日本銃剣道連盟が現在取り組んでいるスポーツ庁支援体制強化事業の「銃剣道授業の安全ガイドブック（仮称）」刊行に向けて、その内容・掲載項目について検討がなされた。

閉講式では石川慎也研究者が講評を行い、全日程を終了した。

